

平成 21 年度「学生による授業に関するアンケート調査」に関する 報告と学生への対応について

福山大学自己評価委員会

平成 21 年度の「学生による授業に関するアンケート調査」では、アンケート項目について見直しを行った。今まで実施したアンケート調査の課題として、「授業評価における学生自身に係る項目」を不要または改善する必要があるという意見が多く寄せられてきた。すなわち、平成 20 年度までは、例えば授業態度や私語といった学生自身に係る項目も含めて 17 個のアンケート項目で構成されていた。学長主導により自己評価委員会で検討した結果、平成 21 年度では、この 17 項目の中から教員の授業に対する評価アンケート項目を抽出し、10 項目のアンケート項目で構成することに決定した。この 10 項目の内容自体については、前年度と同一のものを踏襲した。従つて、過去の評価状況がこの 10 項目に関して比較検討できることになり、授業アンケートの継続性も担保されることになった。平成 21 年度の授業評価調査票は以下のようである。

授業評価調査票

【質問 1】授業は全般的に分かりやすかったですか？

1. 分かりやすかった	4. やや分かりにくかった
2. ほぼ分かりやすかった	5. 分かりにくかった
3. やや分かりやすかった	6. 簡単でもの足りなかった

【質問 2】興味・関心の持てる授業でしたか？

1. 非常に興味・関心の持てる授業であった	3. あまり興味・関心の持てる授業ではなかった
2. 興味・関心の持てる授業であった	4. ほとんど興味・関心の持てる授業ではなかった

【質問 3】この授業の進度は適切でしたか？

1. 適切だった	3. どちらかというと速かった	5. 遅かった
2. 速かった	4. どちらかというと遅かった	

【質問 4】教員の話しさ聞き取りやすかったですか？

1. 聞き取りやすかった	3. やや聞き取りにくかった
2. ほぼ聞き取りやすかった	4. 聞き取りにくかった

【質問 5】板書の仕方は適切でしたか？

1. 適切だった	3. やや不適切だった	5. 板書はほとんどしなかった
2. ほぼ適切だった	4. 不適切だった	

【質問 6】教科書（配布プリントを含む）・参考書などについてはどうでしたか？

1. 適切であった	3. 簡単すぎた	5. 教科書・参考書を指定して欲しかった
2. 難しすぎた	4. 不用であると思った	

【質問 7】担当教員は授業時間を守っていましたか？

1. 守っていた	3. 早く終わりすぎた	5. 休講が多かった
2. 開始時間が遅かった	4. 長引きすぎた	

【質問8】この授業で、担当教員の熱意を感じましたか？

1. 热意が感じられた	3. やや热意が感じられた
2. ほぼ热意が感じられた	4. 热意が感じられなかった

【質問9】質問に対する担当教員の対応はどうでしたか？

1. 热心に対応した	3. あまり热心ではなかった	5. 質問に行ったことがない
2. ほぼ热心に対応した	4. 热心ではなかった	

【質問10】この授業に対するあなたの総合的な評価を4段階で示してください。

1. 満足した	3. やや不満であった
2. ほぼ満足した	4. 不満であった

【自由記述欄】

前年度に引き続き、平成21年度の「学生による授業に関するアンケート調査」でも、その調査結果を当該授業期間中に学生へ必ずフィードバックすることを重要課題として実施した。授業担当教員が学生による授業アンケートの結果を踏まえて、講義の手法に工夫を凝らし、理解しやすくするためのものである。アンケート調査の実施時期は学生へフィードバックする時間を考え、全授業回数の約半数の時点で行った。福山大学における教育改革には、この学生にフィードバックを確実に行なうことが不可欠であると考えている。全教員（非常勤講師も含む）が授業評価を年1回受けるものとしている。授業アンケート調査は前期と後期に実施した。各教員は、原則として前期または後期のいずれかで年1回授業評価を受けることになっている。前期の調査は5月中、後期の調査は11月中までに終了させることが必要である。平成21年度では、アンケート調査の結果を速やかに集計し、前期では7月まで、後期は1月までに各学部に通知することができた。以下に授業評価の具体的な流れを示しておく

- 1) 全教員（非常勤講師も含む）が授業評価を年1回受けるものとする。授業アンケート調査は前期と後期に実施する。各教員は、前期または後期のいずれかに原則として年1回授業評価を受けるものとする。
- 2) 質問項目については、授業評価部会が中心となり自己評価委員会で検討し、学長が決定する。
- 3) 評価を受ける科目は1科目とし、担当教員がアンケート調査を実施する。なお、調査終了後、速やかに事務室へ調査結果（マークシート）を提出する。
- 4) 原則として、前期の調査は5月31日、後期の調査は11月15日までに終了させる。評価結果は速やかに集計し、当該教員に通知する。当該教員は評価結果に基づいて、講義終了日までに評価結果および授業改善策等を必ず学生にフィードバックする。
- 5) 全体の評価結果については、授業評価部会で検討し、自己評価委員会の承認を経てその結果をホームページ上で公表する。
- 6) 教員個人の評価結果については、学外に公表しない。
- 7) 評価結果の情報は学科内の教員間で共有し、学科内で授業改善法について検討するものとする。
- 8) 評価の著しく悪い科目については、授業改善計画報告書を自己評価委員長に提出するものとする。
- 9) 教員個人の評価結果は、自己評価委員会の各学部授業評価部会委員が責任をもって配布するものとする。

学生による授業アンケートの結果を踏まえて

授業アンケートの実施方法は、マークシート方式と自由記述欄への意見記入の方法を、今までと同様に平成21年度でも採用した。調査対象科目は418科目で、アンケート回収率は全受講者数の81.4%であった。可能な項目については、五段階評価や達成割合をパーセント表示することにより、回答を点数化し、各学部、大学教育センター(一般教養科目)、全学の平均値を算出した。その結果を表1に示す。

表1 授業アンケート五段階評価の平均値
(授業の進度、教科書の適切さ、授業時間と守っている割合については%表示)

	経済学部	人間文化学部	工学部	生命工学部	薬学部	大学教育センター	全体
質問1:授業の分かりやすさ	3.76	3.41	3.36	3.63	3.64	3.87	3.61
質問2:授業への関心度	3.71	3.46	3.51	3.62	3.56	3.87	3.60
質問3:授業の進度 %	70	65	61	68	69	76	68
質問4:教員の話し方	4.10	3.86	3.92	4.03	3.86	4.13	3.98
質問5:板書の仕方	4.01	3.60	3.95	3.85	3.84	3.93	3.87
質問6:教科書の適切さ	79	72	71	82	86	79	78
質問7:授業時間と守っている割合 %	93	89	92	94	97	90	92
質問8:教員の熱意	4.26	3.99	4.10	4.14	4.10	4.21	4.13
質問9:質問への対応	4.49	4.35	4.41	4.46	4.43	4.52	4.44
質問10:学生の満足度	4.03	3.73	3.78	3.86	3.86	4.01	3.88

学生の満足度に関しては、平均値として、経済学部は4.03、人間部文化学部は3.73、工学部は3.78、生命工学部は3.86、薬学部は3.86、大学教育センターは4.01であった。全学での平均値は3.88となり、前年度が3.96であったので、0.8だけ低下したことになるが、ほぼ前回と同程度の結果が得られた。学生の満足度は「満足したあるいはほぼ満足した」という状況が伺われる。学生の基礎学力の差が近年ますます大きくなっている現状のもとで、教育の質を保証できるよう不断の授業改善を心がけることが必要である。なお、教員の個人結果については、各学部・学科を通して全教員に伝えるとともに、各教員で共有した。自由記述欄の意見については、原則として当該教員にのみ伝えることにし、その取扱いには十分注意した。

前年度から評価の著しく悪い科目については、授業改善計画報告書を自己評価委員長に提出することになっていたが、平成21年度もこれに該当する科目はなかった。授業アンケートの結果を真摯に受け止めて、授業改善に励んだ効果が伺われる。教員のスキルとしての「分かりやすい授業」、「興味を引き出す」、「板書を分かりやすく書く」などの項目が学生の満足度を高める要因であることが伺える。さらに、教員のスキルに加え、教育に対する熱意も重要であることが分かる。

授業アンケートの調査結果を踏まえての学部・学科ごとの対応について報告を受けた。その結果を以下に示す。

I. 経済学部

経済学部では、前年度と同様に全教員に結果の開示を行った。各教員の個々の評価に対して、学科主任から必要に応じて指導を行った。平成 21 年度の結果を分析するにあたり最初に注目したのは、平成 20 年度の授業アンケート結果に対する種々の取り組みが平成 21 年度の結果にどう反映されたであろうかという点である。取り組みの第一は「分かりやすい授業」への改善努力であった。平成 20 年度 3.67 (全学 3.54) であったものが、平成 21 年度は 3.76(全学 3.61)と両年とも全学の平均を上回り、数値は上昇しているものの大幅に改善されたとは言い難い。第二は「授業への関心や学生のやる気を引き起こす」ための取組みの一環として、「国際経済の学び方」「税務会計事務所訪問」「企業見学」など体験型学習や課外活動を増やした。これらの活動は個々の授業科目に直接関わるものではないが、多くの学生に刺激を与え、学習への関心や意欲を高めることに繋がることを期待した。平成 21 年度の「授業への関心度」の結果は、平成 20 年度の 3.63(全学 3.61)が平成 21 年度には 3.71(全学 3.60)とアップした。平成 20 年度は全学平均とほぼ同じであったが、平成 21 年度は全学平均を 0.11 上回った。これについても全項目と同様に飛躍的に改善が見られたという数値ではない。しかしながら、これらの項目は教育全体の一部であり、その部分だけに目を奪われることなく教育方法全般について大所高所から常に目を配っていく姿勢を続けたい。

今年も 4 月からの入学生に対して 2 月に入学前授業を 4 回実施した。今年のテーマは大学での学習に対する興味・関心の喚起であった。多くの学生が大学での授業に期待をふくらませて入学してくれたのではないだろうか。そして、4 月のオリエンテーションでは授業への関心度が高まるることを期待して、例年以上に時間をかけて、選択科目については自分の興味・関心にあった履修を行うように指導した。

経済学部の場合、受講者数が 100 人、200 人、300 人を超える授業がある。そのような大人数の場合と少人数クラスでは学生の理解度や満足度、教員の授業方法にも違いが出ることは否めない。単にアンケートの結果の対処法に目を奪われるのではなく、常に地道に改善する努力を続けていくために、平成 22 年度からは経済学部教育改善委員会を設けて引き続き授業改善に取り組むことにした。

II. 人間文化学部

人間文化学部では、授業評価部会から返却された結果の中から、各学部の平均点、各学科の平均点とともに、学科の全教員の評価を参考にしながら、まず各教員が自己と学科全体の評価について課題を分析し、その後学科全体として課題と今後の対策について話し合うとともに、各教員が授業の中で学生へのフィードバックを行うという方法をとっている。以下に学科別の総括と課題を述べる。

<心理学科>

心理学科の授業評価は全体として特に低いものは見あたらず、他学科と比較してみても高めの評価を得ている。また、教員間のばらつきもさほど大きくなく、学科内である程度の授業の質は保たれていると考えられる。心理学科では授業以外での学生とのかかわりが密であることも、肯定的な授業評価に反映されているではないかと考えられる。現状に甘んじることなく、より良い授業に向けて努力すべきであることは言うまでもない。また、分かりやすさや関心、満足度など個別に見ると、科目や教員によるばらつきがあることは否めない。それぞれの良い点は伸ばし、欠点を改善していく必要がある。とくに、基幹科目については、学生の興味・関心がやや低い傾向が見られ、別途具体的な意見を聞き取るなどして、原因と対策を考えていく必要があろう。そのために、心理学科では、半期に一度、学生との懇談会を

開催し、授業評価では捉えきれない意見を収集するようにしている。

今年度の授業評価を踏まえて、今後の改善点や検討課題として、次のようなことが指摘される。

- 1)学生参加型、共同学習型の授業で学生の満足度も高くなる傾向が見られるが、そのような形式は教員の準備や力量も問われ、またそのような形式を嫌って受講学生が少なくなること。
- 2)話し方、板書、授業進度などの授業方法についての評価と授業への関心度（内容についての評価）は別であるので、両面を考慮する必要があること。
- 3)学問的な内容と日常生活との結びつきについてもっと触れることにより学生の興味を引きつける必要があること。
- 4)学生の理解と知識の定着を改善するために一部履修年次を再検討する必要があること（たとえば、実験実習、心理学研究法、心理統計法など）。
- 5)授業の進度が速すぎると感じる学生が多いことから、個々の学生の理解度やペースにはこれまで以上配慮しなければいけないこと。

＜人間文化学科＞

「授業の分かりやすさ」では、分かりにくくないと答えたのが16%強、やや分かりにくくないと答えたものを含めると46%弱で、分かりやすい授業をすることが緊急の課題であることが判明した。「関心が持てない」についても、「授業のわかりやすさ」とのはっきりした関連性が見られ、ほとんど関心が持てない学生が9%以上おり、あまり興味を持たなかつたものを加えると37%が我慢して椅子に座っていたことになる。「授業の進度」については、授業の進度が速いと感じたものが22%、逆に遅いと感じたものも約10人に1人の割合でいた。この二極分化が興味の持てない授業であることを物語っている。「教員の話し方」については、3割の学生が聞き取りにくくないと答えているので、教員はマイクを上手に使うなど、発声に工夫が必要である。「板書の仕方」は毎回の評価で指摘される項目であり、今回も3分の1の学生が板書に不満を感じている。そして、さらに問題なのは「板書をほとんどしなかった」と答えた学生が13%もいたことで、これが授業の分かりにくさの原因ともなっていると考えられる。「教科書の内容」を難しすぎたと感じる学生が15%もいることは、教科書の選定に課題があることを指摘しており、分かりにくく授業の原因の一つでもあると思われる。しかし、教科書がそもそも不要であると考える学生も9%おり、これもまた2極分化を示している。「教員による時間管理の適切さ」では、時間を守っていると答えたものが88%おり、おおむね教員が時間管理に努力している様子が伺われる。これは、以前の評価で指摘された点で、かなり是正されてきたのである。しかし、未だに終業ベルを無視して長引く授業もいくらかあるので、一層の努力が必要である。「教員の授業に対する熱意」を否定的に評価する学生はごくわずかで、この点では学生に好意的に受け止められている。「学生の質問への対応」はほぼ適切であったが、問題は全く質問にいかない学生が半分近くに上ったことで、これは学生の授業に対する無関心の表れとも受け止められる。「全体としての授業の満足度」は、上記の項目からすでに明らかになった問題点が、みごとな相関性をもってここに数値として表れている。すなわち、学生の3割近くが何らかの不満を抱いたのである。特に注目されるのは、はつきり不満をもった学生が8%強もいたことで、この数字は授業に興味が持てない学生、進度を遅いと感じる学生、授業が長引いたとした学生、質問への対応に不満を感じた学生の割合に対応しているように思われる。

以上の分析から、学科会議では、いくつかの改善案を話し合った。授業に対する全体的な印象を生み出す要因として、話し方の工夫があるが、これはまず自分の話し方が相手にどのように受け止められているかをはっきりと認識して、謙虚に対応策を講じるべきである。授業の進度に見られる2極分化への対応は非常に困難であるが、物足りなさを感じる学生に

ラスの課題を与えるなどの工夫が必要であろう。板書については毎回指摘されており、それなりに改善の努力をしているのであるが、1年次の初年次教育でノートの取り方などを訓練する必要があろう。それ以外に、中学・高校で行われているように、あらかじめ教材研究において板書の内容を用意しておくことも有効な対策になりうる。学生の理解度や興味・関心を考慮した教科書選定も必要であろう。

＜メディア情報文化学科＞

メディア情報文化学科の授業評価は全体として特に低いものは見あたらず、全学平均と比較しても平均的な結果を得ている。しかし、講義科目別にみるとメディア情報文化学科の専門教育に係る科目担当と、他学部他学科の科目担当の評価結果が大きく隔たっていることが分かった。ここでは、メディア情報文化学科の学生の教育にかかわる講義に限って報告する。メディア情報文化学科の関連科目においてはすべての項目で、全学平均を上回っており、昨年度の授業評価結果を受けて取り組んできた成果が表れていると考えられる。また、学科内である程度の授業の質は保たれていると考えられる。メディア情報文化学科では実技制作や課外活動など学習の成果が具体的に見えることも、肯定的な授業評価に反映されているのではないかと考えられる。現状に甘んじることなく、より良い授業形成に向けて努力すべきであることは言うまでもない。また、分かりやすさや関心、満足度など個別に見ると、科目や教員によるばらつきがあることは否めない。それぞれの良い点は伸ばし、欠点を改善していく必要がある。とくに、理論系基幹科目については、学生の興味・関心がやや低い傾向が見られ、別途具体的な意見を聞き取るなどして、原因と対策を考えていく必要があろう。そのために、メディア情報文化学科でも、個別ゼミなどのときや、半期に一度、学生との懇談会を開催し、授業評価では捉えきれない意見を収集するようにしている。生の声を集め教員の情報共有を行っている。

今年度の授業評価を踏まえて、今後の改善点や検討課題として、次のようなことが指摘される。

- 1)教員の話し方（活舌・発生を含む）、板書の仕方、授業進度、補助資料やスライドなどの資料作成などの授業技術・方法についての評価と、授業への関心度（内容についての評価）は別であるので、両面を分けて考慮する必要があること。
- 2)ワークショップ型授業（学生参加型、共同学習型）の授業で学生の満足度も高くなる傾向が見られる。この形式は教員の事前準備や運用力量が求められる。一方、学生には主体的活動が求められ、日本語能力の力量が問われる。留学生や日本語力の低い学生には特別の配慮が必要。
- 3)学習への動機づけとして、学問的な内容と日常生活や将来の職業像との結びつきについてもっと触れ、学生の興味を引きつける必要があること。
- 4)授業の進度が速すぎると感じる学生が若干名いる。日本語力に課題がある留学生及び基礎学力面で課題のある学生へは、理解度やペースにこれまで以上配慮しなければいけないこと。一方、優しすぎると感じる学生もいる。個々の学生が学習成果を実感できる手ごたえを与える方途を、工夫し、学習の進度、レベルを再検討する。
- 5)学生の理解と知識・技術の定着を改善するために、一部履修年次および単位時間数を再検討する必要がある（たとえば、制作実習系科目など）。

授業評価の方法や活用に關わる全体的な問題として、以下の点を指摘しておきたい。

- 1)前期・後期のいずれかで授業評価を受ける方法では前期に集中する傾向が見られ、後期は学科で1科目というような状況も発生した。今後はただ担当者の希望にまかせるのではなく、前期・後期のバランスを学科として調整するか、あるいは、前後期とも実施することで、授業方法の進化をきめ細かく把握するという考えも必要であろう。

- 2)新たに導入された回答項目による結果の分析方法は、平均値表示と比べて直感的な把握が難しいという印象がある。
- 3)授業評価が高かったわりに学生の試験の成績が良くないという場合もあり、授業評価によって明らかになることだけでなく、授業の良否の指標となる手がかりをより多面的に収集して授業の改善に臨む必要がある。
- 4)各自の改善策や学科としての取り組みを学科・学部・全学で共有する機会があればよい。

III. 工学部

工学部では、学科ごとにアンケート結果を全教員で共有し、今後の講義や学生指導に反映させることとしている。前後期で実施された「授業評価アンケート」の集計結果に基づいて、各学科での対応を報告する。

＜電子・電気工学科＞

今年度の授業アンケートの総括として、最も気付いた点を挙げれば、質問8「教員の熱意」、が工学部の中で最も高い(4.47/5.00)ことである。また、これに関連した項目である質問9「質問への対応」に関しても、第1位の情報工学科(4.56)に続く評点(4.54)となっている。特に、質問8に関しては、他学部の平均点と比較しても極めて良好な結果となっている。

しかしながら、これに反して、質問1「授業のわかり易さ」に関しては、工学部中の3位であり、他の理系学部の平均点と比較しても、それより低い値となっている。また、学科内の各教員の個人得点に注目してみても、この項目に関しては、2点台となっている教員が複数あった。

以上の結果を考察すると、授業に臨む教員の姿勢や意欲は、極めて良く、学生もその姿勢を評価しているのであるが、その割には授業内容が理解できないというジレンマが見える。このたびのアンケートでは、学生の姿勢に関する項目「熱心に取り組んだか」が割愛されているため、明確な判断ができないが、中には、教員の教授技能の低さに依存した評価点の低下があるものと思われる。

教授技能としては、発声、板書などが質問項目として挙げられているが、これらに関して当学科の各教員の評価点は目だつて悪いものではない。恐らく、教授技能として最も重要なのは、授業のテンポ、間、あるいは、双方向型への工夫などである可能性がある。この技能を計る項目が無いことが残念である。

当学科では、このたびのアンケート結果を受けた上で、学生へのフィードバックを実施したが、実施に先立つ、学生へのフィードバックに関する各教員の観点は、上記の点を自覚し、改善の努力を図ろうとするものが殆どであった。従って、この努力を続けることで更に学生の理解度が向上するものと期待される。

＜建築・建設学科＞

建築・建設学科では、授業アンケート評価結果に基づいて全教員が該当授業の見直しを行った。これに基づいて学生にフィードバックを行った。さらに、次年度に向けた改善計画書を作成し、その結果を学科主任に提出した。さらに、アンケート対象外科目においても、担当科目に対して自己点検を行い、次年度に向けた改善計画書を作成した。

＜情報工学科＞

平成19年度では、授業アンケートの満足度が平均3.5、平成20年度の満足度が平均3.8で

あった。一方、平成 21 年度の授業アンケートではその値が 4.0 と着実に向上了している。これは、工学部および全学でも上位であり、当初の目標である 4.0 を達成した。そして、全教員が 3.5 以上であり、特に問題の授業はなかった。また、今回のアンケート結果は、各授業の中で学生に結果を公表している。今後は質問項目で比較的評価が低かった「授業への関心度」の項目を中心に改善することにしたい。具体的には、学生の予習、復習を促すため、時々、理解度をチェックするテストを各授業で行う。また、授業の冒頭で、前回の復習を行うなどして、学生の授業に対する理解度やモチベーションを上げたい。

＜機械システム工学科＞

前期・後期ともに授業アンケート結果の全データを学科内授業担当全教員に配付・公表周知して情報を共有し、各授業担当教員が評価結果を確認して具体的な改善方法を早急に検討できるように努めた。

授業アンケートの結果を残りの授業からすぐに学生にフィードバックするべく、授業担当教員各自が改善方法を策定した。

学生へのフィードバックの方法については、各授業担当教員が授業時にアンケート結果とその改善について学生に口頭で伝えるなど、迅速な対応に努めた。

IV. 生命工学部

生命工学部では以後の講義や学生指導に反映させることを目的として、授業評価アンケートの結果を原則として学科毎に全教員に開示し、それぞれの学科が独自の取組に活用している。

＜生物工学科＞

調査した全ての授業科目の評価結果を学科全教員に配布した。評価結果の全体的傾向を概観し、個々の担当科目に対する評価について自己評価を求めた。全体的傾向については、パワーポイントを用いて学年毎にクラス担任が学生に対して説明した。個々の授業については担当教員がそれぞれ学生にフィードバックし、授業改善に役立てた。

＜生命栄養科学科＞

調査した全ての授業科目の評価結果を教員全員に配付し、今後の学生に対する指導や講義に反映することにした。評価項目のうち、板書の仕方や話し方、授業時間の遵守など講義の技能に関する項目と、満足度のように学生の評価が必ずしも真の講義の評価に結びつかない項目があり、アンケート結果に対する講義でのフィードバックについては各教員の判断に任せている。

＜海洋生物科学科＞

調査を実施した全科目に関する評価結果を学科会議で公表し、学科教員間で認識を共有した。満足度の項目で点数が低くなった化学系科目については、学生がより興味を持つことができる講義内容を関係教員間で検討し、平成 23 年度シラバスに反映させることにした。また、評価の低さが教員の教育技術に起因していると判断された科目については、担当教員に授業方法の改善を求めた。

V. 薬学部

薬学部では、前期に31名、後期16名の教員が授業評価アンケートを実施している。アンケート結果は、教員全員に回覧し、今後の学生に対する指導や講義に反映することにしている。授業評価を受けた薬学部教員に対するアンケート結果から、授業評価が授業の改善に役立っていることが分かった。しかし、授業評価に関する結果を学生にフィードバックした教員は約半数であった。薬学部では、1つの講義を複数教員で担当する科目が多いので、アンケート結果を受け取ったときにはすでに該当講義が終了しており、フィードバックできなかつた教員がかなりいたためである。アンケート結果が講義終了後となる場合は当該学生に対しての授業改善には繋がらないが、次年度の学生に対する講義で改善するようとしている。この意味で授業評価アンケートの意義はあるようである。教員に対するアンケートもを行い、その意見を集約して全教員に配布している。例えば、プリント配布、板書の文字を丁寧に大きく書く、声を大きくゆっくり話す、パワーポイントを使うときカーテンを閉めるようにする、鮮明さを求める配布物はコピー機で印刷する、確認テストなどの演習を取り入れなどの講義手法の改善が行われている。

また、講義内容を整理する、パワーポイントの図に言葉を入れる、理解しやすいような事例や現場での応用例を関連付けて話すなどの講義内容の改善が行われている。

授業評価の時期や調査方法については、新入生に対しては前期授業の後半でアンケートを取る方が良いとか、科目によってはアンケートの時期に担当授業が終わっているなどの意見もあり、いつでもアンケートが取れるように準備するとか、実施時期に自由度を持たせて欲しいなどの意見がある。

その他、授業評価のアンケート項目や授業評価についてフィードバック方法や教育力向上のための具体案などについても意見が寄せられている。これらの点は今後の課題として検討していく予定である。

おわりに

平成21年度の「学生による授業に関するアンケート調査」では、特にアンケート項目について検討した。アンケート項目の中で、「授業評価における学生自身に係る項目」を検討する必要があるという指摘が多く寄せられた。平成21年度からは、この17項目の中から、教員の授業に対する評価アンケート項目を抽出し、10項目のアンケート項目で構成した。この10項目の内容については、前年度と同一のものを踏襲し、今までの評価結果との比較検討ができるようにした。今回導入したアンケート項目については、一部の学科で問題点が指摘されているものの、全体として大きな問題はなかったものと自己評価委員会では判断している。今後しばらく、このアンケート項目を変更せずに評価や改善点のデータを蓄積する必要があるものと考えられる。

平成21年度の「学生による授業に関するアンケート調査」でも、前年度と同様に、学部・学科内の教員間でアンケート結果を共有するために速やかに通知した。その結果、講義終了日までには、評価結果を踏まえて学生にその結果や授業改善等の具体的方法についてフィードバックを行うことができた。従って、授業の中盤で、アンケート調査を実施し、学生へのフィードバックを行うことができた。しかし、複数教員による授業科目のある一部の学部では全員の教員が学生にフィードバックできない場合もあった。全員が学生へのフィードバックが行えるように工夫して徹底すべきであると考える。この点は今後の問題である。しかし学内全体としては、学生へのフィードバックを行うことにより教育方法や内容を真摯に受け止め、教育改革の一助になっていることが確認でき、このアンケート調査が福山大学方式として定着したことが伺われる。

一部の学部で指摘されているが、前期・後期のいずれかで授業評価を受ける方法では前期に集中する傾向が見られることも事実である。更に、授業評価が高かったわりに学生の試験

の成績が良くないという場合もあるなどの指摘もある。各自の改善策や学科としての取り組みを学科・学部・全学で共有する機会をもつことも重要である。

平成21年度でも前年度と同様に、大学全体の総合評価（満足度）は良好な状態を維持できているものと判断できる。授業アンケートを数年にわたって実施し、その結果を学部・学科の中で共有する効果が確実に表れている。個々の授業については、かなりのばらつきが存在するのも確かである。課題となる部分については、高い評価を得ている授業を参考にするなどの普段の努力が必要である。

教育効果を上げるためにには、学生の学習意欲、教員の講義技能と熱意が不可欠である。学生の学習意欲は、履修時の初期の関心度と講義から得られる興味との相互作用といえる。教員の立場からは、講義のスキルと熱意の双方が重要であり、授業アンケートの結果から、これらの点はかなり反映できているものと判断している。

分かりやすい授業をすることは、最も重要な課題である。授業を分かりやすくするには、学生の能力に応じて講義の手法に工夫をしなければならない。その際、目標到達レベルを容易に低くするのではなく、大学教育として教育レベルが十分に維持できているかを把握し、より一層の教育の質の向上を目指していく必要がある。学生の基礎学力の差が近年ますます大きくなっている現状のもとで、教育の質を保証できるように不断の授業改善を心がけることが必要である。